



あとがき

eラーニングファンダメンタルという流行の名前につられて(?)この本につきあってくださった読者の皆さんの期待はどの程度満たされ、どの程度裏切られたのだろうか。また、「裏切られた」部分のうちのどの程度が、「裏切られてがっかりした、時間の無駄であった」と感じられ、どの程度が「裏切られて良かった」と感じられただろうか。執筆を終えて、気になるところである。

本書は、< eラーニングという虎の威を借りた、ID啓蒙のための本 > である。eラーニングの動向や技術的なことについては様々な解説書が出ている。一方で、IDのことを書ける人が日本にはいないんだ、ぜひ書いてくれ、と小松秀圀さん(メディア教育開発センター客員教授、NPO法人日本eラーニングコンソーシアム理事長)に勧められて、その気になった結果の産物である。とてもいい機会を頂戴したことを感謝している。米国留学から戻った1987年以降の15年に及ぶID動向についての勉強不足を一気に補うことができた。筆者が書きにくい企業内教育の実態を踏まえた論考(第1章と第2章2節)については、小松秀圀さんご本人に、また、eラーニング技術の標準化動向については、日本の第1人者である仲林清さん(NTT-X)に助力していただいた。この二人のおかげで、少しはeラーニング色が補充できたと感謝している。

本書は、2003年9月16日から22日までに実施された文部科学省大学共同利用機関メディア教育開発センター主催のSCS特別講義「eラーニングファンダメンタル」のために短期間で準備したものをベースに、講座後に加筆訂正を加えてパッケージ用に改訂したものである。一番大きく加筆された部分は、特別講義受講者の手による「受講者の反応」や実力診断課題への「答案例」である。この特別講義は、日本におけるIDの仲間づくりを目指し、IDを専門とする者が「紺屋の白袴」だと批判されないようにと最善を尽くしてデザインした[第13章参照]。その筆者の熱意が伝わったからか、あるいは最初から(無料とはいえ5日間の集中講義という悪条件を承知で)熱意がある方々が集まったためか、おそらくその相乗効果の産物として、とても質の高いやり取りが行われた。その結果を次に生かすという趣旨に賛同いただき、「執筆料なしのニックネームのみの明示」という条件でテキストへの転載を快く承知していただいた受講者の皆様のご協力で実現した。記して感謝します。

本書は、SCS特別講義をビデオ収録・編集したCD3枚組と合わせてパッケージ化され、NPO法人日本eラーニングコンソーシアム(eLC)より提供される。また、本書で事前学習された方を対象にしたブレンディング講習も予定されている(<http://www.elc.or.jp/semina/semina031215.htm>)。ブレンディング講習用の事前学習用テキストとして、また、ブレンディング講習を受講されない人にとっても完結した自己学習手引きとして、活用いただけるように配慮した。ブレンディング講習のためのWebサイトは、eLCで提供される予定であるが、広く一般にIDを知ってもらうための活動の一環として、岩手県立大学ソフトウェア情報学部鈴木研究室に、「eラーニングファンダメンタル学習支援サイト」を公開する(<http://www.et.soft.iwate-pu.ac.jp/eLF/>)。あわせてご利用ください。

さて、筆者は、本を買うかどうかを判断するとき、タイトル(とくに副題)と目次、そしてまえがきを読んで、奥付に書かれた執筆者の経歴に目を通し、その次にあとがきを読む。あとがきが「なるほど」と思えたら本を買ってじっくり読む。これと同じ手法で本書を選択している読者もいるのではないか。となれば、このあとがきは、しっかり書かなければならないことになる。

いちおう上記で「しっかり書いた」つもりではあるが、不足分は下記の文章で補ってください。これは、拙著『放送利用からの授業デザイナー入門』第8章「授業デザイナーとしての力量」(1995年、日本放送教育協会：絶版、[Available online] <http://www.iwate-pu.ac.jp/home/ksuzuki/resume/books/1995rtv/rtvcont.html>)の一部を再掲したもので、筆者がIDに出会ったときの想いを綴っている。本書が読者諸氏にとって、IDとの出会いであったとしたら、それがよき出会いであったことを切に願っている。もしも筆者の出会いに少しでも共感してくれれば幸いである。なお、読者は企業内教育や高等教育の文脈におられると思うので以下の文章の中の「授業」という言葉にはいささか違和感を持たれるかもしれないが、あえてそのまま残してある。ID=授業設計として学校現場への普及・啓蒙を目指してきた筆者のこれまでの活動の足跡として、味わっていただければ幸いである。

1 授業を設計するのですか？

そもそも授業を設計(design)する、あるいは授業デザインとは何を指して言うのだろうか。「設計」あるいは「デザイン」という言葉をことさら用いなくても、教師は日常の授業案を考え、授業を営んでいる。子どもたちの顔を思い浮かべながら授業で使えるようなネタを探し、授業の起承転結を構成し、準備物を整えて授業に臨む。放送番組を使うときも使わないときも、公開研究授業でもふだん着の授業でも、具体化の程度の差こそあれ、授業の計画をあらかじめ頭に描いて教壇に立っている。日常の雑務に追われる毎日

で、もう少しじっくり教材研究をして授業に臨みたい、との思いがなかなか実現できないで悩んでいるといったところであろうか。

授業実践の積み重ねから、ベテランになれば自分の授業スタイルを確立し、事前の準備に必要な時間も徐々に少なくてすむようになるのかもしれない。あるいは逆に経験を積めば積むほど、授業について考えれば考えるほど、「授業というのは奥が深いものだ」との思いを強くする方も少なくないはずだ。そんな経験と授業への思いに支えられたベテランの授業実践から学ぶものは図り知れないほど豊富で、憧れの的でもある。教師として、あの先生のようになれたらいいなと思う理想像は、だれしもが持っていると思う。

人と人がぶつかりあう授業に対して、設計(デザイン)という言葉を使わなくても「計画」でよいのではないか。それならば教師である以上、毎日だれでもやっていることだ。そもそも授業は「生き物」であるから、あらかじめ詳細に設計などできるはずはない。細かく計画を立てれば立てるほどダイナミックな授業進行が難しくなり、(公開授業の時のようなよそゆきの)予定調和的で型にはまった薄っぺらい授業になってしまう危険性すらある。大筋で計画してきたことを子どもたちにぶつけて、子どもの顔を見ながらその場で臨機応変に変更しながら授業を構成していく力が大切なのだ。

教壇に立つ日を夢見ていた学生の頃、もし筆者が「授業設計」という言葉を耳にしたら、おそらくこんな類の反応をしたに違いない。当時、漠然と中学校の教師になろうと考え、数学と英語の免許を両方とれないものかと調べ回っていた。そんな中、日本語を使わずに絵や文脈で初級英語を教えるGDM^[1]という英語教育法に出会い、中学校の英語教師への道を歩もうと決意した。

その後、視聴覚教育や教育工学の研究に触れ、渡米して教育工学の中でもシステムの授業設計(Instructional Design)を中核とするフロリダ州立大学大学院に学んだ。そこでは、松尾芭蕉の「不易と流行」になぞらえれば、メディアは時代と共に代わるもの(流行) 授業設計の考え方はどんなメディアを用いる授業にも有効な方法(不易)という立場で、カリキュラムが組まれていた。日本でも耳にしていた授業設計という言葉が英語になるだけで、とても新鮮に感じられたものだった。

この経験を通して、自分自身の考え方もずいぶん柔軟になってきたものだと思う。言葉で表すと少し変だが、四角四面のカッチリした設計という考え方も悪くはないと思える柔軟性がでてきた。それまで柔軟な授業へ固執していた自分が柔軟でないなと気づいたと言ったらよいのだろうか。

[1] GDMは、Graded Direct Methodの略。詳しくは、次の文献を参照されたい。

・吉沢美保(1976)「GDMによる授業の進め方」伊藤健三他(編)『英語指導法ハンドブック1～導入編～』大修館書店
・吉沢美保(1981)『絵を使った文型練習(第17版)』大修館書店

2 授業を設計しないのですか？

授業設計とは、授業の青写真を描くことである^[2]。我が家を新築する際の「設計図」を思い浮かべればよい。リビングはなるべく広く、大きな窓が欲しい。できれば天井も高くしたい。台所は対面式にして食事の準備中も家族の会話に加わられるようにしたい。夢は膨らむ一方であるが、現実には厳しい。予算も土地も限られているので巨大な家を建てることもできないとすれば、何かを得るためには何かを犠牲にしなければならない。リビングを広くする代わりに各自の寝室は狭くてもしかたないとか、吹き抜けにしたかったが二階にもう一部屋確保するためにそれをあきらめるといった具合に折り合いをつけて、設計図をつくっていく。設計図ができれば水回り、電気やガスの配線、構造的な強度など技術的な観点からのチェックを加え、場合によっては「部屋の中にどうしても柱が一本立ってしまう」などということも余儀なくされるかもしれない。

設計という言葉には、技術的な条件の存在が含まれている。家を建てるのであれば、理想の家づくりを設計図に表現する際に、例えば水回り、例えば配線図といったどの家にも共通して備わっている条件がある。配線図がきちんと描けたからといって住みやすい家ができるわけではないが、電気の配線図を用意することはどの家づくりにも必要な条件の一つである。

人にものを教えようとする場合もそれは同じだ。どんな授業にも共通して具備していたほうがよいことには、例えば第2章^[3]で紹介したガニエの九教授事象のような子どもの学びを助けるという観点からの工夫がある。この枠組みを何の目的のために使うのか、あるいはそれをどのように実現していくのかは授業を構想する人によってさまざまだろう。しかし、授業が学びを助けることを目的として行われる限り、学習心理学の研究成果を踏まえていた方がよいことは明らかである。

技術的な条件を備えている授業の方がそうでない授業より学びを助ける可能性が高いのならば、授業を計画する際にその条件を検討するのも悪くない。授業者の意図をより確かに伝えるための視聴覚コミュニケーション、あるいは子ども同士の学習活動をより効果的に組織するためのリーダーシップ論などの観点から、授業の技術的な条件を踏まえて授業を設計してみるのも悪くない。技術的な条件を具備したからといって、ベテランの授業の足元にも及ばないかもしれないが、何か手がかりがつかめるかもしれない。いろいろな授業を比べてみるときの、あるいはベテランの授業の何がすごいのかを読み取るための枠組みになるかもしれない。そう思うようになったのである。

^[2] 鈴木克明 (1989) 「米国における授業設計モデル研究の動向」 『日本教育工学雑誌』 13 (1)、p.5

^[3] 本書では、ガニエの9教授事象は第9章で紹介されている。

3 バランス感覚と効率重視

設計という言葉には、技術的な要素が含まれていること以外にも、さまざまなニュアンスが込められている。まず、全体との関係からのバランスを保つために構成要素の取捨選択を迫ることが挙げられる。家を建てるときには、予算の制約があり所有している土地の広さも無限大ではない。同じように、授業で伝えたいこと扱いたいことは山ほどあっても、授業時間は無制限にあるわけではない。子どもたちの理解力にも限りがあるから、教師がスピード違反をしてまくしたてて、教師にやらなければならないことを網羅したという安堵感があっても、子どもに学びが成立するかどうかは定かではない。授業時間に限りがあるからこそ、時間を有効に使う工夫が必要になる。同じことを達成するのならばなるべく短時間でという発想、つまり効率重視の発想は、そこから生まれる。

一度きっちりとした設計を行うことは、それに縛られて身動きができなくなることを必ずしも意味しない。それはむしろ、計画変更に伴う長所短所を瞬時に明らかにするという効果を生む。例えば、ある授業が予想を越えて白熱し授業時間の延長が必要であると感じたとき、ここでこの授業を延長するとどこかにそのしわ寄せが生じることを考慮する必要がある。年間計画があるのにも関わらず教科書の三分の二しか終わらないという事態は、何を捨てて何を取るかを見極められないバランス感覚の欠如から発生する。そもそも、綿密な計画がないところに臨機応変はない。計画がなければ、それを変更するという行為はない。行き当たりばったりのみが存在する。

筆者が旅に出るときは、なるべくツアーを避けて気ままに過ごすようにしている。しかし、出発前に旅の情報は綿密に集め、計画もきっちり立てる。貴重な時間をなるべくうまく使いたいと思うからであり、計画を立てること自体が旅の楽しみの一部だと思うからでもある。例えばパリの二日間。ルーブル美術館は一日では鑑賞できない。しかし、ここであと一日予定を割くとパリ郊外の街シャルトルを訪ねる日が取れない。ルーブルに一日、シャルトルに一日と計画する。いざ行ってみると、いつも現地で過ごす時間は不足するので、現地での計画修正の連続になる。実際に訪ねて、やはりルーブルでもう一日と思うかもしれない。予定どおりに旅をすすめるかここで変更するかはその日に決めるとしても、事前に旅行日程の詳細を検討しておかなければその場での確な判断はできないだろう。計画をじっくりとながめることで、ここで予定より時間を使うことが他に及ぼす影響を考え、ここで得るものと他で失うものを秤にかけて決断を下すことになる。どちらを捨てるにしても「また来ればいいさ」というのが筆者の結論で、旅は止められなくなるのではあるが...

授業にせよ旅行にせよ、やりたいことの割に時間が限られているのが世の常だから、設計という言葉の裏にある「効率」や「バランス」という観点も捨てがたいと思うようになった。

4 ゴール達成の重視

設計という言葉は、青写真をつくるという最終作品の姿を表すと同時に、その作成手順が目的からの「逆順」であることを示唆している。いきなり授業の起承転結をどうしようか、という手順の計画に入らないことを強調する意味が込められている。家を建てるときには、材料や作業日程を心配する前に「どんな家を建てたいのか」を十分に検討する。それと同じように、授業の設計でも「子どもたちがどう変化する授業なのか」をまず十分に吟味する。どうやって授業をするか(How)より前に、何を学ばせるのか(What)、それをなぜ学ばせるのか(Why)を検討せよというわけである。

授業の計画を建てる際、最も大まかでよい「本時の指導過程」が最も詳細に記述され、最も議論が必要な「中学校三年間の社会科でどういう教育を行うのか」とか「今年度の研究では何を明らかにするのか」という全体的なゴールが美辞麗句の羅列で終わってしまうことが少なくない。美辞麗句の文言については慎重に検討を重ねる。しかし、それを日々の授業実践のなかにどう実現していくのかという最も肝心な点、つまり大きい目標と一時間ずつの授業をどう結び付けていくのかについての吟味が一番最後にまわされてしまう。そうすると、教科書の何頁から何頁までを終わらせるというノルマが目標にすりかわり、木を見て森を見ずの罠に陥ってしまう。

設計という言葉を使うのであれば、授業設計はゴール達成へ向けての計画であり、その手段は柔軟に、いろいろな可能性の中からゴールへの近づき具合をもとにして最善手を選んでいく。旅で時間が不足してどちらを取るかという局面に立たされたときには、「どちらを選択することがこの旅全体を見たときにふさわしいか」を考えればよい。大きな目標が見えていれば、思い切ってあきらめる勇気、捨てる勇気ももてる。選択の理由がはっきりしているので、後悔も少なくすむ。目標を重視し、それに一歩ずつ近づいていくという考え方にすっかり魅力を感じてしまった。(中略^[4])

7 私にも使える科学的な方法論

「釜石での短い教員体験で痛切に感じたことは、教師は子どもに対する愛情だけでできる仕事ではないということ。ベテランに比べて自分に教わった子どもたちは不幸であった。教師には子どもに確かな学習を成立させる知識と技術が必要。」という自らの教壇経験に基づいて、授業設計の考え方を日本に根付かせた沼野一男の願いは「ベスタロッチのような天才でなくても、私にもせめて大過なく子どもたちを教育できる科学的な教育方法」に出会うことであったという^[5]。授業を「設計する」というアプローチとそれに必要な技術的基盤の習得に明け暮れたアメリカでの研究生生活を今振り返ると、筆者が得たものは、日本で目の当たりにした憧れのベテラン教師の授業に少しでも近づくための、「私にも使える科学的な方法論」であった。

^[4] メーガの3つの質問がここで紹介されていた。本書の第5章参照。

^[5] 沼野一男(1986)『情報化社会と教師の仕事』国土社教育選書8、p.188

編著者紹介

鈴木克明 (すずき かつあき)

生年：1959 年千葉県市川市生まれ

所属：岩手県立大学ソフトウェア情報学部・教授

専門：教育工学、情報教育、教育メディア研究

学位：P h . D .

(米国フロリダ州立大学大学院教育学研究科教授システム論専攻)

著書：Instructional designs for microcomputer courseware (1988 年、Lawrence Erlbaum Associates: 分担共著)、教育の方法・技術(1989 年、学文社: 分担執筆)、放送利用からの授業デザイナー入門(1995 年、日本放送教育協会)、高度情報化社会の学校(1997 年、ぎょうせい: 分担執筆)、教材設計マニュアル(2002 年、北大路書房)、教育工学を始めよう(2002 年、北大路書房: 共訳・解説) など

学会：日本教育工学会(理事・編集委員・大会企画委員)、日本教育メディア学会(理事・研究委員)、教育システム情報学会(評議員・編集委員・英文誌編集委員・eラーニング技術委員会幹事)、日本教育工学協会(理事) など

e ラーニングファンダメンタル

パッケージ版テキスト

2004 年 1 月 20 日 初版第 1 刷発行

監 修：清水 康敬

編著者：鈴木 克明

発行人：小松 秀圀

発行所：特定非営利活動法人日本イーラーニングコンソシアム
〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町 1-4-3 日本橋 MI ビル 6F
電話：03-5640-1017 FAX：03-5640-1018

編著者電子メール：ksuzuki@soft.iwate-pu.ac.jp

学習支援サイト：<http://www.et.soft.iwate-pu.ac.jp/eLF/>

©2004 Katsuaki Suzuki, All right reserved.